# 盲唖学校の成立と山尾庸三

## －吉田松陰の思想と時代背景－

久田信行

群馬大学教育実践研究　別刷
第 26 号　89～100 頁　2009

群馬大学教育学部　附属教育臨床総合センター

# 盲唖学校の成立と山尾庸三
## －吉田松陰の思想と時代背景－

久　田　信　行

教育学部　障害児教育講座

キーワード：明治，訓盲院，盲唖学校，視覚障害，聴覚障害，障害児教育

（2008 年 10 月 31 日受理）

### Ⅰ．はじめに

教職大学院に代表されるように、教育において実践は重視されている。同様に、特別支援教育でも、「実践的」であることが求められていると言えよう。

視野を広げて、「実践的」であることを標榜する分野を眺めると、物理学や化学、鉱物学等の「理学」を基礎分野としつつ、実践との関連で教育・研究する「工学」がある。もともとは工業との関連で発展したが、工業のみに止まらず、人間工学、教育工学、環境工学等、実践的な学問分野に「工学」がつくことに気づかされる。

この工学を明治初期に日本に根付かせて「我が国工学の父」と呼ばれる山尾庸三という人がいる。この山尾庸三は、明治 4（1871）年 4 月に工学のエキスパートを育てる高等教育機関として、「工部学校」（「工学寮」として明治 4 年 8 月工部省内に設置、明治 5 年校舎落成、明治 6 年第一期生入学）の設立を建白し、同年の 9 月に太政官に盲唖学校創立の建白書を提出した。

この小論では、工学と障害児教育の最初期を形成した一人の人物を調べることで、その時代背景と「実践的であること」を検討した[1]。

### Ⅱ．障害児教育の嚆矢

明治初期の障害児教育史において、京都府立盲唖院の設立（明治 11 年 5 月 24 日の「仮盲唖院」設立を経て明治 12 年 9 月 12 日「京都府立盲唖院」と称す）[2]と、明治 4 年の太政官への盲唖学校創立の建白書提出はよく知られている事項である。

山尾庸三は、障害児教育の分野では、盲唖学校創立の建白書を書いた人物として知られている。しかし、肩書きが工学頭（こうがくのかみ）で、後に工部卿となったとか、東京大学工学部の前身である工学寮、工部大学校の設立者と紹介されることが多く、どうして工学関係の人が盲唖学校の建白をしたのか疑問が生じる。

この点について、「使節団の一員としてやはりイギリスで障害児への対応に感銘を受けた工学頭、山尾庸三は、1871（明治 4）年、太政官に盲唖学校設立の建白書を提出した。」[3]とあるように、筆者は、人物像もあまり分からなかったので、西欧の文明に接触して障害児教育の必要性を認めた開明派の官僚なのだろうという理解で済ませてきた。

しかし、最近になって、長州五傑（写真 1）[4]の再評価があり、初めて山尾庸三の本格的な伝記が出版され、今まで知られてこなかった事項が明らかになってきた。

**写真 1**　長州五傑(1863 年 10 月頃)ロンドンにて
左後：遠藤謹助　中央：井上勝　右後：伊藤博文
左前：井上馨　　右前：山尾庸三
（野村「長州五傑」英国留学と人物，2002 年所収）

山尾庸三は、上記の引用では使節団として渡欧したと書かれているが、正確には、幕末に密航で留学した長州藩の 5 人の一人であった。その 5 人は、「文明開化」を推し進める原動力になり、「長州五傑(長州ファイブ)」と呼ばれて映画化されるなど最近再評価されている。

筆者もそうであったが、5 人の中で、伊藤博文、井上馨などと比べて山尾庸三の知名度はかなり低く、あまり知られていない。前述の例だけでなく、障害児教育史の文献を調べてみると記述内容にかなりの誤りがあることも段々分かってきた。歴史上の出来事は、当然ながら風化し、時には歪曲されることがある。もっとも、山尾庸三の場合は、あまり知られていないため、情報が伝わっていなかったことが主な原因と思われる。

## Ⅱ．山尾庸三の主な事績

山尾庸三（写真２）は天保８（1837）年、現在の山口市に生まれたが、生い立ちについては、後述することとして、複数の文献やホームページに記載されている障害児教育を中心とした事績を挙げると、次のようになる。

１. 1863 年に松陰の遺骸を小塚原(刑場があった場所)の回向院から現在の松陰神社のある世田谷区若林へ移した松陰の弟子は、高杉晋作、山尾康三ら五名であった。

**写真２**　ラグーザ作「山尾庸三像」(東京藝術大学所蔵) [5]
（この像は破損した石膏像を修復した物。ブロンズ像も現存する）

２．その年、グラバー邸で有名なジャーディー・マセソン商会の手引きで密出国してイギリスへ渡り、ロンドン大学や造船所などで、イギリスの産業を５年間学んできた。グラスゴーの造船所では２年働き、同時にアンダーソンズ・カレッジ夜間学級へ通った。

３．明治元年末に帰国し、最初は山口藩で造船などを講じていたが、明治３年、民部権大丞と大蔵権大丞の兼務を皮切りに、新政府で要職を重ねた。

４．明治４年９月に、太政官に盲唖学校創立の建白書を提出した。

５．さらに、明治 13（1880）年、楽善会訓盲院開設に山尾は重要な役割を果たし、明治 15（1882）年には楽善会会長となった。

６．大正４（1915）年には、日本聾唖協会の総裁になり、大正６（1917）年、81 歳で没した。

## Ⅲ．山尾庸三の生い立ち～留学

以下、主な伝記としては兼清正徳著「山尾庸三傳」[6] を用いる。

実際は富農の三男として出生したが、父親が萩藩士とする記述も散見され、「萩藩の勘定方」と明記した文献さえある[7]。兼清（2003）によると、山尾家は元々武士の家であったが、帰農して農家となっていた家系である[8]。小郡（町）の出身とする記述[9]もあるが、正しくは現在の山口市出身である。秋穂二島が、藩政時代の「小郡宰判」[10] に位置していたため誤解されたものと思われる。

兼清(2003)から抜粋してまとめると、

> 山尾庸三（やまお　ようぞう）は天保８（1837）年 10 月８日、周防国吉敷郡（すおうのくに　よしきぐん）、（小郡宰判：おごおりさいばん）二島村（ふたじまむら）（明治 12 年に秋穂二島村：あいお　ふたじまむら)、昭和 19 年からは山口市秋穂二島）の長浜の山尾忠治郎（28 歳）母末子の三男に生まれた。幼名は冨士太郎。祖父の 18 代市五郎は文化 11（1814）年に塩田として開拓された二島村長浜に住むようになった。父忠治郎は、二島村では萩藩士繁沢家の給庄屋[11] を務めた。庸三の頃には、繁沢石見が当主で、萩藩大組若年寄大頭役を勤め、石高は 1024 石余り、「忠治郎は繁沢家の石津勘九郎と

懇意になり、繁沢家の家計整理に貢献し、それを徳として石見は、13 歳の庸三を萩に呼んで召使いとした。これが庸三の出世の糸口となった。」と兼清（2003）は主家との関係を記している。

7 歳で寺子屋へ行き、小郡宰判代官所（＝勘場；かんば）の手子（書記役）を勤めた。「勘場」から「勘定方」[12] と誤記されたのであろうが、勘定方は役職であり、山尾庸三の経歴上の「勘場」は代官所を意味する。

安政 3（1856）年、繁沢石見の家来のまま、父親の援助で 20 歳のとき江戸へ遊学 [13]。齋藤弥九郎の練兵館（千葉周作の道場と勢力を二分していた道場）へ入塾。萩藩から来ていた桂小五郎（後の木戸孝允）の薫陶を受ける。木戸孝允とは木戸が没するまで 20 年余りの交誼が続き、訓盲院の設立でも世話になっている。

次に述べるように、吉田松陰の弟子集団と行動をともにしていたが、吉田松陰の直弟子ではなかったようである。山尾庸三への吉田松陰の影響を指摘した文献 [14] もあるし、筆者もその影響を重視しているが、直接会ったという記録はない。木戸孝允は松陰の弟子の一人であるので、彼を通じて山尾庸三はかなり詳しく松陰の考えを知っていたと推察されるが、山尾庸三が江戸遊学の頃、松陰は主に萩にあって、入獄していたり、松下村塾で後進の指導をしたりしていた。安政 6（1859）年 6 月 25 日に松陰は江戸へ護送されて到着し、7 月 9 日に幕府評定所に入るまで日比谷の毛利藩邸にいたものと思われる [15]。その期間のみ接触の可能性がある。しかし、おとがめを受けている身の吉田松陰に、藩士でもない山尾庸三が接触することは困難だったと推察される。

松陰の死後、文久 2（1863）年 12 月 12 日イギリス公使館を焼き討ちしたときのメンバーは、山尾庸三以外は久坂玄瑞ら松陰の弟子であった。

文久 2 年 12 月 22 日（1863 年 2 月 10 日）には伊藤博文と山尾庸三は、「群書類従」の編纂で有名な塙保己一の四男、塙忠宝（通称は次郎）を暗殺したとされている [16]。伊藤（1998）はこの事件をかなり詳しく紹介し、塙忠宝が「天皇廃位について故事を調査したとされ反発をかっていた。」と、誤解で暗殺されたという [17]。

さらに、文久 3（1863）年 1 月 5 日高杉晋作らと松陰の遺骸を世田谷若林へ改葬したのも松陰を師と仰いでいた弟子 5 人の集団で、それに山尾庸三も加わっている。

これらに山尾庸三は参加していたので、松陰の弟子集団のメンバーに加えられていたと推察される。ちなみに、英国への密航の 1 か月弱前、「文久 3 年（1863）4 月 18 日付で藩は庸三を陪臣から藩の士籍に列し」、留学の内命があった [18]。

文久 3 年 5 月 12 日、後に長州五傑（長州ファイブ）と呼ばれる、伊藤俊輔（博文）、井上聞多（馨）、遠藤謹助（造幣局の改革を進め、桜で有名な「造幣局の通り抜け」を始めた）、野村弥吉（後に鉄道の父と言われた井上勝）、山尾庸三（後に我が国工学の父と呼ばれた）の 5 名は藩命で英国へ密出国し、9 月 23 日ロンドンへ到着した。山尾庸三は 3 年ロンドン大学で学び、後半の 2 年間を、グラスゴーのネピア造船所に勤め、アンダーソンズ・カレッジ(後述のダイアーもそのカレッジの学生であった)の夜間学級に通い、造船を学ぶことに費やした [19]。明治元（1868）年 6 月に出航して、12 月に帰国した。

山尾庸三自身は、明治 33 年頃の取材に対して「倫敦に留まって工藝機械の学問を致して居りまして、ヂブロマを取りましたが、日本人で歐羅巴のヂブロマを取ったのは、私が嚆矢（はじめ）てださうでございます、其の後もグラスゴーの機械学校に這入って勉強して、明治元年に帰朝しました。」と語っている [20]。ロンドン大学を卒業の後にグラスゴーに行ったものと推察される。

グラスゴーの経験が後の盲唖学校創立の建白に大きな影響を与えている。「アサヒコム　MY TOWN　山口」というサイトの記事を以下に引用する。

（庸三は）「英国の造船所で修行中、職工の中に唖者がおり、熱心に働いていた。彼らは巧妙な指の字を書き、何も知らない私たちにもよくわかった。教育によって、彼らは健常者以上の能力を持てる」と説いた。多くの聾唖者がなぜ造船所にいたのか。造船業に詳しいグラスゴー大学のマイケル・モス教授（56）＝ビジネス史＝は、こう説明する。「昔は船に打ち込んだリベット [21] の数で給料が決まったため、皆が必死でたたき続け、造船所内は常に大音響でした。何年も働くと耳が遠くなる人が多く、造船所内では健常者同士も手話を使っていた。造船所では聾唖者も十分に仕事ができた。」[22]

山尾庸三の存在を再認識させた「長州ファイブ」という映画では、若干脚色され、聾の女性がロープを作る工程で働いていて、山尾庸三と恋するようになり手話で会話するというストーリーであった。しかし、後述の建白書で「図引（設計）大工鍛冶等」が指文字を用いていたと記載されている。

## Ⅳ. 官僚として

山尾庸三は最終的には初代の法制局長官として入閣し、子爵となり、81 歳で没するまで、工学と障害児の教育の発展に努めた。

### (1) 工部省設立

明治 3（1870）年 3 月 9 日に、鉄道建設技師として来日したイギリス人技師モレルは、工業事業の推進、つまり鉄道建設、鉱山経営、道路改修、港湾開鑿、灯台設置などを管轄するための政府の「一大公共事業の省」が必要だとして、同年 4 月 28 日にその建議書を提出した。

これを受けて民部大輔大隈重信、民部小輔（しょうゆう）伊藤博文は、モレルの建議の実現案として「工部院」を設立することを提案した。

山尾庸三は、明治 3 年 4 月 9 日に 34 歳で民部権大丞兼大蔵権大丞（ごんのだいじょう）に任命された[23]ので、工部省誕生前夜の頃である。当時、民部省の一部局としての「工部寮」程度とする案に対して、山尾「庸三は寮程度の小部局なら、それは自分の素志にそぐわないから辞職すると意気まき、紆余曲折を経て庸三の強硬さが押し切り、閏 10 月 20 日に工部省として新設されることとなった。

同年 11 月 4 日付けの岩倉具視宛の大久保利通書簡に、『工部省之事、寮之筈之所、山尾辞表差出、終ニ省ニ決定御発表有之候。』と事は決定された。」[24]

工部省については、大蔵省が明治 22（1889）年に「工部省沿革報告」を著し明治 3 年から 18 年 12 月の廃止までの沿革を詳細に記録している。機能の大部分は、機械、造船、電子、鉱業、鉄道などの産業振興および工業教育の政府部局と考えられる[25]。

民部、大蔵省の良くて課長程度の山尾庸三の意見が参議や大臣たちの意見を覆したのである。それだけ、政府における山尾庸三の力は、数少ない工学の専門家であるだけでなく、木戸孝允や松下村塾の出身者、薩摩藩からの留学生など、それなりの人脈があった事もあろうが、何より工部省が必要という熱意と迫力が有り、周囲を説得したものと推察される。

### (2) 工学寮の設立と盲唖学校創設に関する建白

山尾庸三は、前述のように明治 4（1871）年 4 月に工学のエキスパートを育てる高等教育機関として、「工部学校」[26]の設立を建白し、同年の 9 月に太政官に盲唖学校創設の建白書を提出した。今日の工学専門教育機関の創設と、盲唖学校創立を同じ年に明確なプランとして建議しているのである。

我が国の障害児教育に関する重要な文書であるので、以下に、縦書きを横書きにし、片仮名を平仮名へ変え、句読点がほとんど使われていないので、文章の区切りに空白を入れ、若干読みやすくした「建白書」を次にあげることにする。

盲唖学校を創設せられんことを乞ふの書[27]

今般工学寮を開かせられ臣庸三其頭に任ぜられ誠に以て　[28]天恩隆渥（りゅうあく）不治奉報所 然るに臣固より才疎に識浅く大任に当り難く深く憂慮悚顔の至りに堪へず 然りと雖も聖旨の恭き敢て辞し奉り候も恐入候間　粉骨砕身浅陋（せんろう）を不顧　勉励奉職可仕と奉存候　因之広く西洋諸国の方式を取捨し前途盛大の目的を立て校中の規則事務の章程等追々可奉伺と即今取調中に有之候　臣又熟考仕候に盲唖廃疾の窮民天下の広きを以て之を推算するに其幾許なるを知るべからず　是等の窮民自ら存する能はず他人の救恤（きゅうじゅつ）を仰ぎ僅かに口を糊すると雖も凶年饑歳往々凍餓の死を免るる能はず 真に愍然（びんぜん）に堪へざる次第　彼の西洋各国の如きは不然盲聾瘖唖（おんあ）と雖も救恤の方法洽（あまね）く及ぶのみならず 又之を学校に入れ文学算術 [29] 工芸技術各適宜の教導を施し勉強従事其熟練に及むでは大家先生の名称を全世界に得る者往々有之　臣曽て英国に在て造船所に入り修行中親しく見るところ同所の図引大工鍛冶等の内唖なる者も亦不少　人と談話応接皆指頭を発転し文形を模作して之を弁ず　其敏捷可驚毫も苦渋の態を見ず而して其技芸の精妙容易に人の及ぶ能はざる所なり　是無他教育の善く及ぶところ以て彼国文教隆盛の景況推知すべし　依是見之我国の盲聾と雖も教育宜を得ば亦何ぞ然らざらん　然るに是をして自を存

する能はず饑寒に陥らしむ豈皇国の欠典と謂わざる可けんや　故に今西洋諸国の式に倣ひ先ず盲学唖学の二校を創建し一校毎に男女二局を分ち教師を外国に招き以て天下の盲唖を教導し適宜の工芸を授与し其成立に随ひ盲男盲女唖男唖女各適意婚嫁するを許し天然の倫理を全うせしめ　又漸を以て其他各種廃疾の窮民に及ぼさば多年ならずして西洋諸国に譲らざる可きか　是れ無用を転じて有用となし国家経済の道に於て万一の裨補無くんばあらず　而して彼等各其力に食み世上の良民と共に自主の権を得　以　皇朝至仁の沢に沾（うるお）はんとす　是臣が伏して渇望懇願する所なり仰ぎ願はくば臣の鄙衷（ひちゅう）を御洞察被為在前文盲唖の二校創建即今御許容の程奉希望候　但し其費用に至つては官財を不消費一種良法を立て天下好善の人に募り弁済するの在慮に有之候

右御許可の上は其方略施設の顛末詳悉取調べ言上可仕候　誠惶誠恐　頓首謹言

明治四年辛未九月

工学頭　　山尾庸三

中野（1985）によると、「1871（明治4）年9月、工学頭山尾庸三は太政官に『盲唖学校ヲ創設セラレンコトヲ乞フノ書』という建白書を提出し、盲学校、唖学校の二校の創設を渇望・懇願している。イギリスの造船所でろう唖労働者たちを見てきた山尾は、西欧諸国の盲唖廃疾の窮民に対する救済と教育の普及を論じ、ひるがえって、わが国における放置の状況を『皇国の欠典ト謂ハザル可ケンヤ』と難じ、西欧諸国の方式にならって、まず盲学校、唖学校を建てて教育を施し、漸次『各種廃疾ノ窮民』にまでこれを及ぼし、『無用ヲ転シテ有用』となし、国家経済に裨益せしめんとした。」[30]と要約されている。

山尾庸三の考え方を「『富国強兵のための国民皆学』の理念が聴覚障害児を含む障害児にまで及ぼされたもの」と評する人もいる[31]。一方では「英国造船所での聴覚障害工員との出会い体験をふまえて、障害者の『無用有用化』論を立てた。これは、『障害者廃人』観を打破し、自立した市民として社会参加させる、という近代的な障害者観であった。」と評する向きもある[32]。

また、盲聾二校からと提案しているが、その他の障害についても漸次創建するように提案していること、文の最後に、「許可を得られましたら、その方略、施設の計画など詳しく悉く取調べて報告します(意訳)」と書かれていることが注目される。恐らく、明治4年に構想していた事が、明治13年の楽善会訓盲院の建設に際して、山尾庸三が設計等にリーダーシップを発揮した下敷きになっていた可能性が高い。

### (3) 工部大学校の設立

明治4（1871）年の「工部学校」の建白は、明治6（1873）年10月1日に工学寮として実現し、開校された。開校に先立つ、6月6日にはヘンリー・ダイアー（都検兼工学教授・機械学）ら9人の外人教師が東京に着いた。ダイアーは都検（校長の意味）として採用されたが、25歳の若さであった。このダイアーの構想が、理論と実習をサンドウィッチのように組んだカリキュラムで、後に英国で一部採用されるなど、先駆的な構想であった[33]。

明治10年官制改革で、工部寮は工部大学校と改称された。明治12年に6年制の第一期の卒業生が生まれた。その中には、化学の高峰譲吉、建築の辰野金吾などふくまれ、明治13年にその内11名は選ばれて英国留学をした。例えば、留学した3名の留学生はグラスゴー大学のケルビン卿から「私の教えた最高の学生」と賞賛された[34]。

あるシンポジウム[35]で、明治期に優秀な職工の地位を大学出のエンジニアが奪っていったという事（鈴木淳，2008）[36]に関連して、大学出のエンジニアは理念優先で技術が無いと評した技術史家がいた。この意見は、フランスの技術者教育が、理念中心で技術が重視されていなかった事から推論したものと思われる。

しかし、例えば、工部大学校を前身とした東京大学工学部電子電気工学科を1909年に卒業した高尾直三郎が設計し、自らコイルを巻いた、卒業の翌年の明治43（1910）年製造の5馬力誘導電動機（モーター）は、国産第1号のモーターで、現在でも動態保存展示されている[37]。このように、大学卒は理念だけという先入観で当時の工学教育を推定するのは問題だと言えよう。工部大学校の卒業生は、技術を重視していた当時の英国の大学でも通用する、高度の知識と技能を有していたと推察される。

### (4) 楽善会と楽善会訓盲院

明治7年にスコットランドから宣教医として来日し

た、フォールズは、明治8（1875）年5月22日に訓盲の事業を興すことを提案した。加藤（1991）によると、「楽善会（当時まだそう呼ばれていなかった）はまずキリスト教的慈善として発足した」[38]と評している。明治9（1876）年それまでのキリスト教的立場から変化が起こり、有力官僚を会友に誘うことになり、1月には内務省地理頭杉浦譲、駅逓頭前島密、文部大丞小松彰が参加した。3月26日に楽善会へ山尾庸三が入会し会友となる。山尾庸三は外国や宗教の影響を薄くすべきと主張すると共に、構想へも意見を述べた[39]。このような経緯のなかで、フォールズは楽善会から去っていった[40]。

楽善会教師の高津柏樹によると、「山尾庸三氏、新タニ楽善会友トシテ論ズラク、中村（正直）氏ノ考フル所ハ甚ダ規模小ナリ。今ヤ訓盲ノ事業ヲ興サントテ大イニ天下ニ呼号シオルナリ。然ルニ斯クノ如キ下宿屋的学校ヲ興ストキハ、堂々タル帝都発起者ノ恥辱ナリ。大イニ規模ヲ大ニシテ帝都第一流ノ新建物ヲ急築シ、以テ斯業ヲ始ムルニ如カザルナリ。」[41]

批判されている中村正直は、楽善会の記録をまとめ[42]、東大教授も務めたので、今日、楽善会と言えば中村の名が第一に出てくる。それだけでなく、下記のように、私塾的なイメージとはいえ、障害者の教育を実践していた事は特筆に値する。北野与一（1985）によると、金沢に聾唖院を一時的だが設立した聾才子松村精一郎は、（彼が作った金沢の）「『盲唖院設立ノ議』によれば『明治十一年ノ秋東京ニ抵リ中村敬宇栗本鋤雲二先生ニ従イ遊ビ其鞭策ヲ受シ』とあり中村正直の同人社に学んだのである。」[43]とある。

明治9年12月22日に、木戸孝允を通じて皇室の御内帑金（ごないどきん）の中から盲学校建設資金が下賜された。中野（1985）は、楽善会設立について述べた後に「このうち、前出の長州出身山尾庸三は会の発展にとりわけ力を尽くした。山尾の尽力と参議木戸孝允の斡旋で、皇室から三、〇〇〇円が会に下賜され、寄付金募集に大きなプラスになった。」[44]と述べている。「御内帑金の下賜を引き金として、…寄付金が寄せられ…。明治11年までに1万円、翌12年には2万2千円余となる。会友中の最高の寄付者は庸三自身の450円であり、三条実美、岩倉具視の各300円もある。」[45]と兼清（2003）は山尾庸三の貢献をたたえている[46]。往復の人力車賃は山尾庸三が負担した[47]。

1879（明治12）年3月、山尾庸三は京都盲唖院（明治11年9月設立）を視察している[48]。なお、山尾庸三は、当時の京都府知事の槙村正直（京都盲唖院の設立を認可した知事）と親しく、西陣織の技術者の養成や機械化にも助力したという[49]。

明治13年1月5日、楽善会訓盲院開校。

「3月には東京府下15区6郡の盲人調査を行い、職員は盲児の家を訪問して父兄に就学を勧誘したが反応は鈍かった。大内青巒（おおうち せいらん）は語っている。『岸田吟香君と二、三人で勧誘に歩いたが、三十間堀の裏店の十二、三の盲児の家へ行って、私共は今度築地に盲人の学校を造ったので、来たれば相当の教育をし出来るだけの学問をさせてあげると言うと、母親がひどい見幕でどなりつけた。盲に学問させて何になる。だがその学校へ行ったら一日幾ら貰えますか。この子は按摩に弟子入りさせるつもりだ。治療ができるようになれば一人天保銭一枚が貰える。学校へやったら何日でどれほどの銭がとれますか。これには閉口して戻ってきた。』と。それが実情であった。」[50]。

明治13年6月の記録では「山尾庸三頻りに力を凸字製造の業に尽くし宇都宮三郎に謀りて…」とあり、紙製凸字教材作成に、他の会友も含めて努力していた[51]。

緒に就いたばかりの訓盲院の実態は上記のように、庶民のニーズから生まれたと言うより、開明的な文化人や開明派の官僚がかなり苦労して、障害児の教育の道を切り開いて行った営為だったことが伺える。

**写真3**　岸田吟香（国立国会図書館「近代日本人の肖像」データベースから許可を得て転載）

### (5) 岸田吟香

ここで、本題から逸れるが、岸田吟香について少し述べる。上記のように、吟香は、実際に生徒の募集のために家庭訪問をするほど楽善会訓盲院の設立と発展に努力していた。発足の頃、楽善会の会頭古川正雄、書記岸田吟香とあり、最初から中心人物だった。

そもそも、吟香は眼疾となり、患者としてヘボンに出会った。後に、ヘボンの辞書編纂に協力して上海へ行く程になり、薬の調合も手伝っていた事から、明治元年にヘボンに処方して貰った目薬の「精錡水」(せいきすい) を販売し成功した。従軍記事などでジャーナリストとしても成功し東京日々新聞主筆も務めた。また、国内外に楽善堂薬舗を開き、後に同仁会病院の中国での展開や東亜同文書院、医学書の出版販売等、幅広く活躍した[52]。なお、吟香は明治8年9月に銀座二丁目に店舗を構えたが、それは日々新聞社の隣で、新聞社と兼業の形で始められた[53]。

このように岸田吟香は、大陸への西洋医学・医療の導入、漢方を含めた医書の普及に努力するなど、広い視野をもっていたことが推察される。ちなみに、麗子像で有名な洋画家岸田劉生は四男。

### (6) 訓盲唖院と聾唖協会

閑話休題、明治 15 (1882) 年、山尾庸三は楽善会会長となった。すでに寄付金を基礎とした学校経営に行き詰まりが生じていた。明治 18 年 9 月に、全会友に図り、同年 10 月に文部省直轄学校とするよう直轄願いを提出した。同年 12 月から文部省直轄学校「訓盲唖院」と改称した。さらに明治 20 年 10 月に東京盲唖学校と改称された。明治 23 年に訓導石川倉次が、ブライユの点字を翻案して訓盲点字を作り、盲教育に新生面を開いた。

直轄学校になった後も、明治 19 (1886) 年、訓盲唖院に「山尾庸三が貴族や婦人慈善会から寄付を募って計画した寄宿舎が竣工した」[54]。また、毎年桜の季節に盲唖者を自分の「品川御殿」に招いて桜見の集いをした。このように、山尾庸三の支援は続いていた。1915 (大正4) 年には、乞われて日本聾唖協会の総裁に就任した。没後大正 14 (1925) 年社団法人日本ろうあ協会が設立されたとき、嫡子山尾三郎子爵が総裁に推挙された[55]。

### (7) 工部卿以降の官職

明治 14 (1881) 年 10 月、憲法制定のための「参事院」議官となり、その任務に基づいて明治 16 年に巡察使となって各県の実態を調査した。自由民権運動をしている人々について「故ニ当局者ニ望ム所ハ、之ヲ仇敵視セズ、其貧困ニシテ産業ナキヲ憫ミ、務メテ業ニ就カシムルニ在リ」と報告している。明治 18 年、宮中顧問官と法制局長官(初代)となり、第一次伊藤内閣に入閣している[56]。

### (8) 工学会会長

日本工学会は英国のギルド (土木技術者協会など) をひな形に、ダイアーの構想から生まれたという。卒業後の技術者が生涯研鑽する場として工学会が組織された[57]。

日本工学会のニュースに「初代会長は工部大学校創立の功労者で工部卿をつとめた山尾庸三子爵が 1882 年 (明治 15) ～1917 年 (大正 6) の死去まで 36 年間就任。」[58] とあるように山尾庸三は工学教育の中心的存在であった。大正 6 (1917) 年 6 月に会長を辞任し、12 月 21 日に 81 歳で没している。

## V. 松陰の考え

山尾庸三の思想形成に大きな影響を与えた吉田松陰の障害児教育に関する考え方を紹介する。

中野 (1991) によると、「西欧の科学知識を中国へ伝えたイタリーの宣教師アレニは…西欧の学問体系を伝えた『西学凡』や、ここに触れる『職方外紀』(五巻、1623) など多くの書物を著述した。…『職方外紀』をも読破している幕末の志士、吉田松陰が『福堂策』の中に示した思想 (筆者注：一部分の障害が、全人的障害と異なること) がある。」また、「箕作省吾による『坤輿図識』および『坤輿図識補』は幕末における世界地理書として最も広く流布し、…なかんずく、吉田松陰が愛読したことは彼の『野山獄読書記』『丁己日乗』などからも如実に窺えるところである。」なお、『坤輿図識』には盲と聾が中心だが、それ以外の障害者の教育や福祉も幅広く紹介されていたという[59]。

「吉田松陰が『獄舎問答』において『余ガ策スル所ハ、武備ノ冗費ヲ省キ、膏沢ノ民ニ下サントナリ、四窮無告ノ者ハ、王政ノ先ニスル所、西洋夷サヘ貧院病院幼院聾唖院等ヲ設ケ、匹夫匹婦モ其所ヲ得サル者ナ

キ如クス』と記しているのも『坤輿図識』『八紘通誌』などから得た知識に基づくものであろう。」[60] と述べ、松陰が『八紘通誌』を一分二朱で購入した記録など示している[61]。

中野は同書で、「実弟に聾者をもち、聾儒谷三山と親交を結んだ吉田松陰においては欧米におけるこの種の教育に特に関心を持たざるを得なかった。『西洋夷狄ニさへ貧院・病院・幼院などの設ありて下を恵クムノ道ヲ行フニ目出度大養徳国（筆者注：やまと＝日本）ニおゐて却テ此制度なき豈大欠典ならす哉』と慨嘆し、更に『西洋夷サへ貧院病院幼院聾唖院等ヲ設ケ、匹夫匹婦モ其所ヲ得サル者ナキ如クス』るに我が神国の『お宝』を放置することを重ねて嘆ずると共に、歩を一歩進めて『武備ノ冗費ヲ省キ』これら制度を樹立せんことを主張しているのである。ここには、夷狄を排斥しつつも、その長所は進んでこれを採り、幕藩体制補強の具とせんとした彼の姿が如実に窺えるのである。」と述べている[62]。

吉田松陰の思想やその背景を考える上で、岡村壽正著「吉田松陰の唖弟」[63] は参考になる。著者は熊本県立高校の英語の先生を永年勤め、養護学校の校長も勤めて退官した。この本は、二部構成で、前半は松陰と弟、後半は、重度の脳性まひによる肢体不自由者で、詩集などを出された著者のお嬢さんのことを中心に綴った「風に立つ」というエッセーという構成であった。

以下、「松陰の唖弟」の概略を述べる。

松陰は山鹿流兵学を学び、後に長崎や平戸でオランダの軍艦を見学したり砲術を学んだりした。

松陰に聴覚障害のある弟がいて、1850 年に熊本を訪れ、加藤清正公廟に弟の敏三郎の平癒を祈りに詣でた。その熊本訪問の折、宮部鼎蔵に会った。

翌 1851 年（黒船来襲の二年前）6 月 13〜22 日の間、熊本藩の宮部鼎蔵と萩藩の吉田松陰は、館山、浦賀、網代など房州、相模の防備を視察し、幕府へ警告の意見書を出していた。その影響か、2 年後の嘉永 6（1853）年 6 月 4 日、久里浜[64]への黒船来襲をうけて、幕府は同年 12 月に浦賀一帯の警護を熊本藩と萩藩に出した。

このような状況下で、当時の科学技術の第一線を学んでいた吉田松陰は、黒船来襲の 3 か月後に、以下の手紙を鎌倉から郷里の兄あてに書いている（岡村，1989 より筆者意訳）[65]。

外患内乱が一緒に起こる例は歴史上少なくありません。今日、外患（黒船）があって、海防、海防と言わない人はいないのに、まだ、民政と言う人がいると聞きません。外患と内乱は同時に起こるので、海防と民政を一緒に行うことが基本的なことなのです。（中略）　王政の優先課題ですので、困っている人々に手をさしのべてあるべき所を提供しなければなりません。夷狄（いてき）の西洋でも、貧窮の人、病の人、幼い人（野山獄における松陰の文書では「聾唖院」と記されているがここでは「幼院」とある）の施設があって社会的弱者の福祉があるのに、徳を養う国である日本にこの制度が無いことは大欠点ではないでしょうか。（この部分の原文は『西洋夷狄にさえ貧院、病院、幼院などの設ありて、下を恵むの道を行ふに、目出度き大養徳（やまと）御國において却って此の制度なき、豈に大缺典ならずや。』）

維新という革命期のまっただ中に、民政の必要、特に福祉の重要性を説いている。

他の文献は、前述のように、聾唖の弟がいたことや、松陰が接していた海外情報にどの程度のことが紹介されていたかなどの考証をし、主に病院、幼院などの部分から紹介しているため、もっぱら聾唖の弟がいたことが原因で福祉の必要を説いているという解釈であった。それに対して、岡村（1989）だと民政という観点が示されている。

## Ⅵ. 考察

「工学頭」である山尾庸三が、どうして盲唖学校創設の建白書を書いたのか、肩書きと一致しないことから、さまざまな説がある。

主には、吉田松陰の弟が聾者であったため、長く盲唖教育に尽くしたと言う説がある(伊藤，1998)[66]。

一方では、塙保己一の後継者を暗殺した事を理由に、生涯盲者の教育に尽くしたが、それは罪の意識からであるとする説もある（堺 正一，2005）[67]。

また、楽善会に見られるように開明派の官僚として、上からの改革をしたのだという説もある。

いずれの説も、楽善会訓盲院の開設までの説明にはなるかも知れないが、盲と聾のいずれかに偏したかかわりになっていないことと、その活動が死ぬ歳まで続いたことを説明するには無理があると考えられる。

吉田松陰の思想との関係を指摘した文献もあるが、

それを深く考察してはいない(伊藤，1998)[68]。

先にあげた、中野・加藤（1991）に挙げられているように、松陰は『西洋夷狄ニさへ貧院・病院・幼院などの設ありて下を恵クムノ道ヲ行フニ目出度大養徳国ニおゐて却テ此制度なき豈大欠典ならす哉』と慨嘆していた点が専ら注目されている。そうなると、福祉や特殊教育ということになる。ちなみに山尾庸三の建白でも「大欠典」と指摘しており、論理構成も似ているとは思う。

もう少し視野を広げると、岡村（1989）[69]に紹介されているように、海防のみではだめで、民政が重視されるべきだという考え方がベースにあって盲唖院の例も書かれているのだと考えることも出来る。

この点に注目するなら、工業の振興や工学教育の創設、障害児の学校の創設、鉄道の敷設、貨幣の造幣、地方政治、そして憲法制定、など、松下村塾と松陰の影響を受けた人々が民政へ大きく貢献したことが顕著である。

ちなみに、吉田松陰の画像が残っており、それには松陰自身の賛（自賛）が書かれているが、自賛を勧めたのは、松陰の少し先輩の藩校の教師で、揖取素彦（かとり　もとひこ）という人である[70]。彼は、松陰の妹を妻とし、しばらく松下村塾で松陰の代わりも務めた。維新後、旧熊谷県・群馬県の県令（知事）として活躍し、離任するとき前橋の人々から惜しまれて書状を送られている[71]。

伊藤博文にしても、憲法を制定し、内閣総理大臣として内政につくしている。

一つの仮説であるが、障害者への憐憫の情や後悔の念だけで、二つの活動を生涯にわたって続けることができるだろうか。山尾庸三にとって、工学も盲唖教育も民政として、革命の世において民政を重視する吉田松陰の考えに基づいたものであり、一つの価値観として山尾庸三の中では統一が取れていた可能性がある。

工学というと、今日では理系の学問で、経済学とは距離があるイメージであろうが、恐らく明治初期には産業を興すことと同義で、そのためには人を作らなければならないというところから工部大学校へと発展していったものと推察される。その際の、カリキュラムはダイアーの構想であるが、基礎的な数学や物理、化学の学習や実験とともに実践を合わせたカリキュラムであった。

ロンドン大学やアンダーソンズ・カレッジで学んだ山尾庸三にとって、経験則だけの実践は考えられなかったものと推察される。同時に、横須賀造船所にフランス人技師が多数いて、フランス式の技術者教育(理論重視)についても短期間だが接していた可能性が高い山尾庸三であるので、英国とフランスの比較はした上での、ダイアー案の採択だったと推察される。

その意味では、理論と実践のうち、実践を重視したのだと考えられるが、その実践重視は、理論や基礎をないがしろにしたものではない[72]。

山尾庸三が工学頭になるとほぼ同時に盲唖教育の育成を建白し、詳細の構想も提出する用意があると書いており、その時点で、相当の企画・設計をしていたことになる。そうなると、工学と盲唖教育の二つのプランの実現と、その発展も、生涯にわたって山尾のライフワークであり続けたと推察しても良いものと思われる。

少なくとも、松陰の弟の聴覚障害や塙保己一の実子への暗殺といった障害別のきっかけが主因となって、視覚障害や聴覚障害の教育を看過出来なかったと解釈するには、あまりにも積極的な参画の姿勢がみられるとはいえよう。

謝辞　秋穂村塾　児玉光氾塾頭には本論の基礎となった山尾庸三傳の入手等でお世話になった。障害児教育講座　金澤貴之准教授と技術教育講座　三田純義教授には貴重な助言を頂いた。記して感謝申し上げる

---

1　本論文で引用した資料は二次資料であり、歴史的実証を目的とした論文ではない。歴史研究の成果から、今日的な教育改革や実践的であることに関して示唆を得ることを目的とした論文である。

2　古川は「明治 7 年ノ此ヨリ同校ニ於テ試ニ唖生弐名ヲ教授」と述べている。藤波 高「とり残された子らの京都の教育史―明治・大正・昭和の実践―」文理閣 1988年 p17.

3　山口 薫・金子 健 (2000) 特殊教育の展望―障害児教育から特別支援教育へ― 日本文化科学社; 初版 1993 年, 改訂版 2000 年 p8.

4 野村武史 「長州五傑」英国留学と人物像 内外文化研究所発行 2002 年

5 矢野 真「連載：温故知新２ーラグーザ作『山尾庸三像』の石膏原型に触れた時 ２ー」 http://www.kyuhaku.com/pr/roji/roji_yn-06.html

6 兼清正徳 「山尾庸三傳 ―明治の工業立国の父―」山尾庸三顕彰会発行 2003 年.

7 伊藤政雄「歴史の中のろうあ者」近代出版 1998 年 P214. では、「…山尾庸三は、長州藩の勘定方の子として、1837 年（天保 8 年）に生まれ…」とある。

8 兼清正徳(2003) p14.

9 中野（1991）では、p109 で「山尾は長州藩士繁沢石見の家臣、…」とあるが、同書の後半の、加藤（1991）では「山尾庸三（1837-1917）は長州藩士山尾忠治郎の次子として周防小郡町に生まれ、青年時代に激しい攘夷運動の渦に巻き込まれた。」（p142）と書いてある。中野善達・加藤康昭著「わが国特殊教育の成立」初版1967 年、改訂新版1991 年 東峰書房

10 宰判とは、広域の村々を代官が支配する萩藩の行政区画。小郡宰判は、現在の吉敷郡小郡町、秋穂町、阿知須町の全域と、山口市南部（陶・鋳銭司・名田島・秋穂二島・嘉川・江崎・佐山地域）、宇部市東部（岐波地域）および防府市西部（台道地域)からなり、かつての周防国吉敷郡の南部地域に該当している。 http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/hayashi/kaisetu_o.html より

11 給庄屋とは、萩藩領（蔵入地)の庄屋に対して、藩臣に与えられている領地の庄屋を給領地の庄屋という意味で「給庄屋」という。兼清正徳(2003) p15.

12 伊藤政雄（1998） p214.

13 伊藤政雄（1998）pp165-166. 「（山尾庸三は）松陰と同じ長州の生まれですが、15 歳のとき、江戸勤めの名を受けた父に伴われて、25 歳までの 10 年間、江戸の長州藩の屋敷に住んでいました。…彼（松陰）の思想の影響を強く受け、彼の死後、伊藤博文、高杉晋作、井上馨ら松下村塾出身者と共に盟友として大いに活躍しました。」とある。兼清正徳（2003）によると、江戸遊学は、16 歳の時（嘉永 5 年、1852）という説もあるが、安政 3 年（1856）6 月に 20 歳で神道無念流剣術道場練兵館を開いている齋藤弥九郎の門を叩き、塾頭の桂小五郎（後の木戸孝允）の薫陶を受けた(pp19-20)。また、江川太郎左右衛門に近代兵学、勝海舟に航海術などを学んだ(p20)。
なお、江戸遊学の資金は実家から出ている(p22)。

14 伊藤政雄（1998） p165

15 吉田松陰の動向については、「吉田松陰 年表」を参照した。 http://www.eonet.ne.jp/~kazusin/cyosyu/yosidashoin.htm

16 栗原隆一 「幕末維新暗殺総覧，別冊歴史読本⑰ 日本秘史シリーズ①幕末維新暗殺秘史」 1998 年 pp283-295，新人物往来社． 塙次郎の暗殺に関して、栗原(1998)は、「下手人はいまもってわからない。…」（p287）と述べ、伊藤・山尾説が確定的ではないとしている。

17 伊藤政雄（1998） p218-219.

18 兼清正徳(2003) p36.

19 三好信浩「明治のエンジニア教育 ―日本とイギリスのちがい―」 中公新書 №695 1983 年 p88.

20 中央新聞社「名士の嗜好」明治 33(1900)年 文武堂刊 p91.（国立国会図書館デジタルライブラリ所収）

21 リベットとは、鉄板と鉄板を、つなぐ円柱状の鋲である。今日なら溶接するが、当時は 2 枚の鉄板に穴を開け、リベットという赤熱した太い釘の様な鋼材を穴に入れて、両方の頭をハンマーでつぶして、鉄板を圧着させる方法で鉄板を繋いで鉄船を造った。リベットの両方に工員がいて、一方が固定して、他方をもう一人がハンマーで叩くという作業をした。したがって非常に大きな騒音で、口頭での会話は聞き取りにくかった。

22 アサヒコム MY TOWN 山口 「⑤山尾庸三／造船所の体験 聾唖教育に」 http://home.att.ne.jp/air/walnut/japan-uk/cyousyu-five_asahi05.pdf より

23 当時、大蔵省民部省は一体。大蔵民部卿ー大輔ー権大輔ー少輔ー権少輔ー大丞ー権大丞という階層。兼清正徳(2003) p113. なお、その下は、ー小丞-六等出仕…十五等出仕。

24 兼清正徳(2003) pp56-57.

25 大蔵省 「工部省沿革報告」1889 年（国立国会図書館デジタルライブラリ所収）

26 工学寮は明治 6 年から工学教育の専門機関となり、工部大学校さらには東京帝国大学工学部および東京藝術大学へと発展していくが、山尾庸三が工学頭になった初期の「工学寮」は、工部省の一部局で、山尾庸三は機械工学を担当する工学頭と「測量正」を兼務していた。兼清正徳(2003) p62.

27 中野善達・加藤康昭(1991) p144-145.

28 天や聖は天皇に関係し、改行されているが、高沢忠義編, 萩原裕評閲 1877,1878(明治10,11）年 「献策新編」 第2集 巻2 pp22-24 鹿鳴社（国立国会図書館デジタルライブラリ所収)では改行されていない。文言から、「献策新編」は若干省略が多いと推察し、前掲書から引用した。

29 上記の高沢(1877・1878)では「文字算数」とある。中野善達・加藤康昭(1991) p109 でも「文字算数」。

30 中野善達 「西欧障害児教育情報の導入」 津曲裕次・清水寛・松矢勝宏・北沢清司編著 「障害者教育史～社会問題としてたどる外国と日本の通史～」川島書店 1985 年 p155.

31 小林孝博 (2000) 「聴覚障害児の〈分化〉教育と〈統合〉教育の考察」 第3章 日本のろう〈分化〉教育, http://www21.ocn.ne.jp/~kobataka/education/rou-3.html より

32 ろう教育の明日を考える連絡協議会 http://www.normanet.ne.jp/~deafedu/ 「日本の聴覚障害教育構想プロジェクト最終報告書」第2章 聴覚障害教育の意義と方法の脚注

33 三好信浩 (1983) pp15-26.

34 前掲書 p19

35 法政大学イノベーション・マネージメント研究センター国際シンポジウム「イノベーションの歴史的起点―明治日本における西洋機械技術の導入―」, 2008 年7 月24 日, 法政大学市ヶ谷キャンパス.

36 鈴木 淳 「フランス語学習者から機械技術者へ ―小野正作の明治―」, 洞口治夫編 「大学教育のイノベーター―法政大学創立者 薩埵正邦と明治日本の産業社会―」第Ⅱ部, 第四章, 143-179 書籍工房早山 2008年

37 今日の日立製作所に保存されている。 http://www.gijyutu.com/ooki/tanken/tanken2003/hitachi/5HP_Motor/5HP_Motor.htm

38 中野善達・加藤康昭(1991) p210.

39 兼清正徳(2003) p162.

40 キリスト教への偏見があり、寄付を集めるため表面上身を引いたが、訓盲院開校の式典に出席したという記述もある。小林弘忠 「浮世はままよ ―岸田吟香ものがたり―」 東洋経済新報社 2000 年, p220,pp230-231.
杉山栄 「先駆者岸田吟香」 岸田吟香顕彰刊行会発行 1952 年（大空社復刊 1993 年）では邦人のみになったので山尾庸三が楽善会に入会と述べている（p214.）が、兼清正徳(2003) p162 から誤解と推察される。

41 兼清正徳(2003) p163.

42 楽善会訓盲唖院記録には「明治18年11月 中村正直未定編纂」とあり、明治 8 年から文部省直轄までの楽善会史である。
（筑波大学附属盲学校所蔵, http://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/shiryou/syozou.pdf ）

43 北野与一 「私立金沢盲唖院と聾才子松村精一郎」津曲裕次・清水寛・松矢勝宏・北沢清司（1985） p172.

44 中野善達 「西欧障害児教育情報の導入」 津曲裕次・清水寛・松矢勝宏・北沢清司(1985) p156.

45 兼清正徳(2003) p164.

46 AD SUTUDIES 編集部著「明治期の広告活動」AD SUTUDIES(吉田秀雄記念事業財団) Vol.9 2004 p9.岸田吟香が広告で「これほどまでにして『精錡水』を売り込んだのはその利益により『訓盲院(盲唖学校)』設立という大目的があったから」とあり、岸田吟香の楽善堂薬舗は楽善会のスポンサーで、寄付を上回る貢献をしたと推察される。

47 兼清正徳(2003) p166.

48 中野善達・加藤康昭(1991) p335.

49 兼清正徳(2003) pp213-217.

50 前掲書 p167.

51 文部省編 「特殊教育百年史」1978 年 p106.

52 真柳誠・陳捷「岸田吟香が中国で販売した日本関連の古医書」第97 回日本医史学会総会、札幌（『日本医史学雑誌』42 巻2 号164-165 頁、1996 年
「岸田吟香は一八六六年（慶応二、同治五）に上海へヘボンに随行し、ヘボン『和英語林集成』の印刷に従事。同六八年（明治元、同治七）に上海に再渡して精錡水の販売所を設置。同七五年（明治八）に銀座で精錡水調合所（楽善堂薬舗）を開き書籍も販売。(後略)」

53 小林弘忠（2000） p203.

54 文部省編 「特殊教育百年史」1978 年 p86.

55 兼清正徳(2003) p170.

56 前掲書 pp187-188, pp191-192.

57 三好信浩 (1983) pp42-43.

58 岡本義喬 「我が国の工学系学協会のはじまり」 日本工学会ニュース №425, http://www.jfes.or.jp/notice/news/news425.html

59 中野善達・加藤康昭(1991) p22.

60 前掲書 p29.

61 前掲書 p31.

62 前掲書 p36.

63 岡村壽正 「吉田松陰の唖弟」 「行末川」出版部, 1989 年

64 浦賀ではなく、同じ横須賀市の久里浜。そこの「ペリー公園」に伊藤博文揮毫の碑がある。久里浜は浦賀奉行所の管内だったので浦賀と誤解されている。

65 岡村壽正 (1989) pp46-47.

66 伊藤政雄（1998）pp155-165

67 堺 正一 「塙保己一とともに―ヘレン・ケラーと塙保己一―」はる書房 2005 年 pp178-180.

68 伊藤政雄（1998） pp165-166

69 岡村壽正(1989) pp46-47

70 山田稔 維新史回廊トピックス〈Vol.1〉 吉田松陰像（自賛）〔吉田家本〕 http://www.pref.yamaguchi.jp/gyosei/bunka-s/ishin/topics/topics-no.1.htm

71 前橋市、明治期の迎賓館だった「臨江閣」の展示より

72 兼清正徳(2003) p166. （庸三らが帰国する際に）「出発に当たって、マセソン商会の支配人 H.M. マセソンは、ロンドン大学のウィリアムソン教授へ『二人の若者は貴殿が最初に徹底的に基礎的学習をさせるようにしたことの恩義を深く感じています。』と礼を述べている。」とある。

（ひさた　のぶゆき）